

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

④『ほいくの王様』

迫 共
(浜松学院大学)

落合さよりの『ほいくの王様』は男性保育士だけの保育園を舞台にした漫画です。舞台となるおおとり保育園は、認可外保育施設で和風の建物。イケメンメガネの園長がママたちに「うちの園をぜひ」と声かけして利用者を獲得しています。

保育園は女性社会。女性ばかりの世界に適応できず、一度は保育の仕事を諦めようと考えた主人公の新人保育士、福田育(いく)。彼におおとり保育園の園長は豪語します。「保育士はいわばホスト、ママの要望をかなえるサービス業だ」と。

保育士たちは5人です。中性的なルックスなのに怒ると園長も言い負かす実務家のあると、巨漢のもとスーツアクター(ヒーローショーで戦う役者)うしお、もと引きこもりでほとんど園児とも関わらないヨーヨーの達人えりお、無口なもと建築士のおうすけ、そして主人公のいく。

筆者もかつて認可保育園の園長として働いていました。これは漫画としての極端な設定で、現実にはありえないと言いたくなる部分もあります。でも認可外であれば運営者の思いをもとに、ある程度は自由なことをしても許されるというのも事実です。

もっとも認可外保育施設にも指導監督基準があり、それを遵守しなければなりません。また管轄する都道府県に届け出る必要もあります。

筆者は漫画を講義に使用することがあります。『保育の王さま』は保護者対応をめぐる講義で紹介させて頂きました。3巻から4巻にかけて、園児のケガから保護者トラブルに発展するというエピソードが出てきます。

おうすけ先生とうしお先生が保育園の縁側にすべり台を作ります。子どもたちは並んで仲良く滑っていますが、そういちろう君は自分も滑ろうと近寄り、勢いあまってもき君にぶつかってしまいます。ともき君は転んで頭をケガしてしまいました。そういちろう君の母親は、いく先生とうしお先生に「ケガをさせた子のお名前を教えてくださいませんか? 親御さんにお詫びを…」と言いますが、二人は「子ども同士で解決したことですし、相手の保

護者にはこちらから説明しておきますので」と返答します。これは一般的な対応だと考えられます。

一方、ケガをしたともき君の母親はケガを見て「ゆるさないわよ。相手を教えなさい！」と激怒。うしお先生が「自分も子どもの頃はたんこぶだらけでした。傷は男の勲章っス」と言いだし、火に油を注いでしまいます。

職員会議で園長が叱責します。「今回のケガは保育活動中の事故で園側に責任があると何度も説明して一応納得してもらったが、そういう説明がまったくなかった」と。ケガが発生したらいち早く保護者に連絡して、正確な情報を伝えて不安を軽減させるとともに園から病院に行き、できるだけ手を尽くした上で改めてお詫びをする。そのような対応が、保育現場では求められますが、漫画でも的確に説明されています。

翌朝、ともき君の母親がケガの話をしてしていると、そばにいた園児のろびん君がおせっかいな説明をしてしまいます。「そうちゃんが、ともきおとしたんだ！」と。

そこにそういちろう君と母親が登園。ともき君の母親が呼び止めます。そういちろう君の母親はいきさつを知って謝罪の言葉とともに頭を下げますが、ともき君のママ友たちはそれだけでは収まりません。「一生のトラウマになったらどうするの！」と責められています。実はそういちろう君の母親は熟年俳優の愛人で、ママ友たちの噂の対象になっていたのです。ともき君は母親から「そういちろう君と遊んではダメ」と言われてしまいます。「どうして？」「どうしてもなの！」「…うん」。

実際、保護者同士のトラブルで園児の關係にヒビが入ることは、なきにしもあらずです。子どもたちはさっきまでケンカをしていたのに、もう一緒に遊んでいるという姿を見せませんが、大人はなかなか難しく、こじらせると後々まで尾を引いてしまいます。

そういちろう君の母親は保育園側に「ともき君と遊ばせないで」「できないならあの親子をやめさせて！」と主張します。いく先生とうしお先生が「あんなのモンスターペアレントじゃないですか」と園長に対応を求めますが、園長は「バカか」と一蹴。「保護者をモンスターと決めつけた時点で、クレームの理由が見えなくなる。保護者の気持ちをよく考えろ」と指導します。

いく先生は子どもたちと遊んでいる中で、ろびん君がお母さんたちに「そうちゃんがおとした」と言った、ということを知り出します。その日のお迎え、ともき君の母親は「つき落とされたのではなく、そういちろう君の体が偶然ぶつかって落ちてしまった」ことを知らされます。それでもおさまりがつかない母親に、ともき君は「そうちゃんとなかよしなんだ。ママもなかよしだとたのしいよ」と言います。母親は涙ながらにわが子を抱きしめました。

モンスターペアレントと決めつけると、クレームの理由が見えなくなるというのはまさにその通りです。ラベリング（レッテル貼り）をしてしまうと、それ以外の部分を認識しに

くくなります。クレームをつける親にも、わが子を大切に思う一面や、ママ友の前で体裁よくふるまいたい一面があります。それぞれの面において、本人も気づけない矛盾を抱えていることも少なくありません。

クレーム対応では、保護者の主張に正面からぶつかるのではなく、その主張を受け止めながら、その影に隠れがちな保護者のすぐれた面を見つけるとよいように思います。上記の事例では、ともき君の母親はわが子思いでまっすぐな性格です。そんなお母さんは「ともき君も友だち思いで正義感の強い子に育ててほしい」と願っているのではないのでしょうか。クレームをしっかりと受け取りながら、そのすぐれた面も見ているということを伝えられたなら、やがて信頼を得ることができると思われます。

筆者の経験上、クレームをつける保護者は、実は保育園の味方になってくれる人たちだった、ということが少なくありません。わが子の園はこうあってほしい、こうなるべきだと考えることは熱意がないとできないからです（残念ながら自分本位ばかりの人も、中にはいます）。その熱意に応える姿勢を示し、的確な対応ができれば、わが子の卒園後も長期的に支えてくれることがあります。『ほいくの王さま』はそんなことを感じさせてくれる作品です。